

病児保育奮闘記

(最終回)

子どもサポート H&K

大石 仁美

コロナ禍の中で

コロナ禍で半年余り開店休業状態が続きましたが、10月に入ってから利用者は少なく、手持ち無沙汰の日々。週の初めに兄弟二人利用したと思ったら、翌日からはゼロの日が続き、次の週は一人。その次の週は同じ子が二日続けて利用して後はゼロ。ニーズがないというよりも、たぶん不安感が強いのではないかと、コロナの子がいたらどうしようという不安、または漠然とした不安、それと経済的な理由も大きいのではないかと思います。

どこの職場も不況の影響は深刻で、家族関係に微妙な変化が起きているところもあると聞いています。一方で福利厚生部のしっかりしている職場では、病児保育室の利用にも補助金が出ていて、安心して子どもを預けて働けるという、ポツポツ来ている子はそうした恩恵を受けている子たちです。

まあ、そんなこんなで一ヶ月に4日しか稼働していないという笑えないような状況が続いています。

11月に入って退屈していたある日、思いがけない子がやって来ました。小学5年生のK君です。赤ちゃんの時から利用している子なので、

懐かしいやら嬉しいやら。久しぶりに孫が来たようで、萎えた頭も活性化したようで、ハッスルするバアバです。

見たところ、病気らしき症状もなく、どうもお疲れの様子。小学生も高学年になるとお勉強疲れでストレスがたまるようです。コロナの影響もあるかもしれません。

床に寝転んでゴロゴロしながら本ばかり読んでいるこの小さな博士君に、何かおいしいものでも食べてもらって元気づけようとあれこれ考えて、さて昼食の時間。「お代わり!!」の元気な声にさすが男の子。その食べっぷりの良さにほれほれ。よく食べる子を見るのは本当に気持ちがいいものです。

さて、本ばかりじゃなくて、何か遊ぼうよと声掛けすると「バアバ、将棋できる？」やったことない。「じゃあ囲碁は？」などといわれるとバアバはお手上げ。うーん、困った。外で走り回するには体力がなく、かといって今さらむつかしいゲームを覚える気もなく、絵でも描こうかと紙と絵の具を与えたり、この本面白いと薦めてみたり、学校の様子を聞いたり、仲の良いお友達の話聞いてみたりが関の山。

大きくなった男の子のお相手は若い男性（息子）に任せるよりほかありません。

10 数年前、今思えば腰が痛い泣きべそをかきながらも、20 人分の弁当を作ったなあ〜。春の一時保育は、みんなで手をつないで加茂川べりをハイキングして、あの頃が一番楽しかった！次々とカードを切るように流れてくる思い出に浸りながら、自らの老いと、時代の流れをかみしめています。

K君から、嬉しい刺激をもらった一日も終わり、また何もない日が過ぎていきます。コロナ禍の中で“子どもが来ない”という日々。病児保育奮闘記も、奮闘しようにも出来ない日々が続いています。

そこで、今年最後の、そしてこの 25 回という節目の回で、ひとまず病児保育奮闘記の幕を閉じたいと思います。新たな展開があり、活力にみなぎるような時を迎えることがあれば、またよろしく願いいたします。今まで読んでくださり、励ましてくださった皆さま、ありがとうございました。お声をかけてこのような機会をくださった団先生にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。